

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会
(三八地区) (第1回) 概要

日時：平成28年9月14日(水)

10:00～12:00

場所：八戸プラザホテル 2階 プラザホール

<出席者>

委員

友田 博文 委員、宇藤 裕夫 委員、川浪 孝雄 委員、橋本 芳弘 委員、
石橋 伸之 委員、中村 孝範 委員、吉岡 義久 委員、田村 哲章 委員、
嶋脇 郁夫 委員、四戸 康雄 委員、高橋 力也 委員、
斗沢 一雄 委員(進行役)

オブザーバー

久慈 恵司 県立八戸高等学校長、 福井 武久 県立八戸東高等学校長、
竹浪 二三正 県立八戸北高等学校長、 鎌田 晃説 県立八戸西高等学校長、
三上 幾子 県立三戸高等学校長、 宍倉 慎次 県立五戸高等学校長、
石澤 徳成 県立田子高等学校長、 米内山 裕 県立八戸水産高等学校長、
一戸 利則 県立八戸工業高等学校長、 敦賀 定彦 県立八戸商業高等学校長、
高谷 正 県立八戸中央高等学校長、 中村 健 県立八戸聾学校長、
敦川 真樹 県立八戸第一養護学校長、 神林 宏喜 県立八戸第二養護学校長

1 開会

2 委嘱状交付

佐藤高等学校教育改革推進室長から、各委員へ委嘱状を交付した。

3 高等学校教育改革推進室長挨拶

佐藤高等学校教育改革推進室長から、挨拶があった。

4 事務局説明

(1) 青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会設置要綱
事務局から、資料1について説明した。

(2) 地区意見交換会の進め方と今後のスケジュール

事務局から、資料3により今後のスケジュール等を説明し、了承された。

(3) 高等学校教育改革に係る経緯及び各県立高等学校の状況

事務局から、資料4から資料9について説明した。

進行役から、高校の小規模化による教育活動の影響について、オブザーバーである田子高校長に情報提供を求めた。

- 田子高校は小規模校ではあるが、田子町から多大な経済的支援をいただいているので、同規模の他校より恵まれていると感じている。

本校は昨年度から1学級40人募集となり、来年度には3学年とも1学級となる。生徒数の減少に伴い、教員数も減少している最中である。生徒の減少によりPTA会費、生徒会費等の私費が少なくなり、部活動の遠征などに支障が出るおそれがある。

また、教員数の減少により、部活動の安全を保障できなくなっているため、平成27年度末に2つの部活動を廃部とした。廃部に当たっては、本校は田子中学校と連携型中高一貫教育を実施していることから、田子中学校における部活動の加入状況を考慮した。

さらに、教育課程の編成の幅が狭くなっており、今後、例えば数学Ⅲや物理の科目が開講できなくなる場合、理系志望の生徒の進路希望に応えられなくなるおそれがある。

連携型中高一貫教育の実施においては、中学校の教員が高校で指導する、あるいは、高校の教員が中学校で指導するという乗り入れ授業を行っているが、今後は実施が難しくなるのではないかと心配している。

5 意見交換

(1) 意見発表

委員から、次のような意見があった。

- 重点校については、知識基盤社会やグローバル化等、今後の変化の激しい社会で高校生を育てる点から賛成である。8月に重点校等の試案が発表された。三八地区には、八戸高校、八戸東高校、八戸北高校の3校が6学級規模の普通高校として設置されている。医師や弁護士となる人財の育成を目指す教育という点を考えると八戸高校が重点校であることは納得できる。しかし、理数教育であればSSHを実施していた八戸北高校があり、また、答申には重点校の数は示されていなかったもので、試案ではなぜ八戸北高校が理数教育の重点校にならなかったのか疑問である。県教育委員会においては、重点校の設置基準、設置趣旨等を定めるのかを知りたい。なぜ八戸高校だけが重点校となったのか、保護者や子どもたちに説明できるようにしてほしい。高校のランキング付けが学習塾等でなされているが、重点校が八戸高校になったことにより、そのランキング付けが加速するおそれがあるため、子どもたちにプレッシャーがかからないようにしてもらいたい。募集人員については、県教育委員会で年度ごとに公表しているので、6学級規模の高校については、重点校という名称を付けないまでも、重点校的役割を果たす高校とし、やがて5学級、4学級と学級減していく際に、重点校的役割を外すという考え方もあるのではないかと。また、医

師や弁護士、科学者となる人財を育成することも重要だが、スポーツや芸術分野において世界で活躍する子どももいるので、バランスを考えてほしい。

拠点校については、専門的な幅広い知識が必要であり、4学級が必要である。

地域校については、校名が出た際には違和感を覚えた。現在1学級の高校の教員数を見ると、2学級の学校の半分程度しかいない。1学級の学校であっても、教員数を2学級並みにすることやICTの充実等により、充実した教育環境を整備してもらいたい。

学校規模についてであるが、各高校においては、小規模校であってもコースを設定するなど地域に根ざした教育に取り組んでいる。これまで2学級の学校を県教育委員会は設置してきていることも踏まえ、地域校以外の高校についても、地域校の観点にあるように、地域の人々が納得できるような基準を示した上で協議を進めてほしい。また、国では地方創生を押し進めており、自治体にとって高校は大きな存在である。統合等に当たっては、自治体と十分協議してほしい。

また、特別支援教育については、高校においても特別な支援を要する生徒が増えてきている。教員数が確保できるのであれば、高校でも通級が可能になるような仕組みが必要と考える。

定時制・通信制については、通学に考慮して、交通の便が良い所に設置してほしい。また、ICTや通信回線を利用するなど、多様な教育を受けられる環境を整備してもらいたい。

答申には、八戸市に加え、三戸郡に高校を設置することが望ましいとされていたが、昨年、三戸郡で生まれた子どもは328人である。現在、三戸郡の中学校卒業者のうち、半数は八戸市、十和田市の高校に進学していることを考えると、将来的には、三戸郡の高校に入学する生徒は4学級分になると見込まれる。15年後のことであるので、今後の検討になると思うが、三戸郡にも多様な学びができる高校の設置について検討すべきである。

○ 重点校については、理数教育の面が気になる。

拠点校について、工業高校・農業高校では、複数挙がっているのに商業高校は1校のみである。県内の商業高校は5校であるが、商業の授業を行っている普通科の高校も多いことを考えると、県南にも拠点校があっても良いのではないかと。

地域校については、田子町の田子高校が候補校として挙げられた。田子高校の1、2年生は現在30人を切っており、更に中学生のうち半数以上が町外の高校に進学しているという状況である。町外からの入学者が増えたとしても標準の4クラスはとても厳しい。田子町では上郷、清水頭地域からの通学状況が心配であったが、この地域からの通学が配慮されたのでほっとしているところである。具体的には、清水頭地域から公共交通機関を利用して最も近い三戸高校に通うとしても、始業時間には間に合わない。そのことを考慮していただいたものと感謝している。

連携型中高一貫教育の見直しについても掲げられている。以前、県内では2地区で実施していたが、現在は田子地区のみであり、16年目を迎えた。

田子高校では、全員が進路先を決定して卒業している。一人一人の生徒を大切に、活躍の場を与えてくれているからではないかと考えている。

- 階上町には高校がないため、中学生の多くは隣接する八戸市内の高校に通学しており、通学の利便性が最も重要である。現在、様々な手段を使って通学しているが、今後の通学の利便性によっては高校進学率にも影響が出るものと考ええる。重点校、拠点校への通学手段の確保が必要であり、自宅から安心して通えるよう、公共交通機関との連携が不可欠である。また、通学には財政的な問題もある。学校配置に当たっては、通学環境についても考慮していただきたい。

拠点校については、当地区には現在、工業科、水産科、農業科、商業科があるが、これまで、将来のスペシャリストを育てており、本県の特色である多様な学びを提供する拠点校の整備が必要と考える。進路の選択肢が狭まることがないようにしてもらいたい。

定時制・通信制課程については、修学意欲のある生徒の学習機会が損なわれることがないように配慮してもらいたい。

今後の生徒数の減少を考えると、重点化、拠点化はやむを得ないと考える。

- 重点校、拠点校、学級数等については適切だと考えている。定時制・通信制課程についても適切ではないかと考えている。

教育を受ける機会の確保に関連して、新郷村から八戸市の高校に進学する生徒がいるが、八戸市内の高校に進学すると、高校への通学のため一家転住することもあり、人口が減少してしまい、大きな問題となっている。

新郷村の要望としては、新郷村は八戸市から遠く離れているため、定期バスによる通学が困難であり、通学不可能な高校も多い。また当町の基幹産業は農業であり、所得が低く、私立高校に進学させることができない家庭もある。高校教育を受ける機会の確保という観点から、住む地域によって通学環境に差が生じないように、2点要望したい。新郷村から公共交通機関により通学可能な五戸高校については学級数が減っても存続してもらいたい。また、三戸高校に保護者が送り迎えしている現状を考えると、三戸高校も存続してもらいたい。

- 保護者の視点から言うと、重点校等の試案、充実した教育環境の整備と高校教育を受ける機会の確保の両面からの学校配置、定時制・通信制課程の学校配置等については適切と考える。その他として、子どもたちが安心、安全に通学できることが重要であり、通学時間も重要である。通学ができないような地域については、高校教育を受ける機会を確保するようにしてほしい。

また、県立高校の配置については、当地区は私立高校の数が多く、私立高校との兼ね合いも視点の一つとして必要ではないか。他地区の私立高校と県立高校の比率も気になる。というのは、費用の面から県立高校を希望する家庭が多

いと考えるからである。

- なぜこのような議論になっているかという、子どもがいないことに尽きる。行政は子どもの数、人口増加の方策について考えるべきである。

三戸学園では小中一貫教育を行っている。昨年の中学校卒業生は87名である一方、小学校入学者は57名しかいなかった。私は三戸高校の卒業生だが、私が入学した時は、田子高校、三戸高校の普通科、商業科、南部工業高校、名久井農業高校があり、三戸郡の高校で学科の選択肢が4つあった。しかし、南部工業高校や三戸高校の商業科がなくなり、現在は、工業や商業を学ぶとなると八戸市内に通わなければならない、費用がかかる。

母子家庭が多く、経済的に厳しいと感じるので、三戸郡の通えるところに高校が必要である。勉強して身に付けたことはどこに行っても通用するから、勉強しなさいと小さい頃先生に教わったものである。地方創生と言うが、郡部に生まれると教育も医療も大きい町に比べ受けるのが難しいというのが現状である。三戸高校、田子高校、五戸高校で定員が割れているが、それぞれの高校に入学した生徒は本当に必要があって入学したことを考慮してほしい。子どもを持つ郡部の親としての思いである。三戸高校がなくなるのではないかという噂もある。

小さい規模でも良いので、郡部の学校を残してもらいたい。

- 高校の保護者の立場では、重点校、拠点校、地域校の考え方は問題ないと思うが、連携イメージは昔の土農工商のイメージに似ていると感じる。普通科が一番上にあり、それに続いて工業科、農業科が続いているように見える。八戸高校だけが医師を目指すのではなく、八戸北高校や八戸東高校でも目指す生徒がいる。それにもかかわらず、重点校という看板をつけると、八戸高校が一番位が高いという序列が中学生に植え付けられるのではないか。以上のことを考えると、重点校、拠点校、地域校という言葉は気にかかる。

また、子どもの数が少なくなるのは仕方のないことであるが、子どもたちが看護師等の資格を目指す私立高校への希望が増え、一層県立高校への進学希望が少なくなるのではないか。したがって、スポーツ科学科や表現科等、県立高校の特色や魅力ある学科は大事にしてもらいたい。

- 重点校、拠点校、地域校の配置や高校教育を受ける機会の確保と充実した教育環境の整備については専門的な部分があるので、次回に持ち越したい。

地域に学ぶ子どもたちが親の送迎に関する拘束時間が厳しいという話も聞いたことがあるし、費用がかかると聞く。三戸郡にも受け入れる高校は必要ではないか。

南部圏地域の人口減少をシミュレーションしたが、現在八戸市の人口は24万人程度だが、30年後には南部圏地域全体が現在の八戸市並みの人口に落ち込むものと予測している。我々も婚活事業等を行っているが、なかなか人員が

集まらず、課題となっている。

人口減少が問題なのであれば、県民が経済と教育のバランスを正常に保ちながら、県民全体で考え、自治体がそれをリードしていくべきである。

- 基本的に提案されていることについて異論はない。教育を受ける権利ということを考えて、八戸市内の高校と地域校はギャップがあると感じる。同等の教育が保障されているのかという疑問があるので、教員配置について検討してもらいたい。

小学校は年々特別な支援を要する児童が増えてきている。この子どもたちは、将来的には高校に入学することになるが、そのことに対する配慮が欠けているように感じる。保護者は、我が子は高校に入学できるのだろうかと不安に思っている。高校にも特別支援学級や通級指導教室を設置することを検討する必要があるのではないか。

地域校については、総合高校のような選択肢がないと生徒も選べないのではないか。ニーズに合わせて高校がつくられているのか。逆に、高校の配置に子どもたちのニーズが左右されているのではないかと感じる。子どもたちが農業をやりたいと思っていながら、八戸高校に行かなければならないと思っっているのではないか。農業高校に行っても大学に入学できるという選択肢を示すべきなのではないか。

- 中学校は教科担任制である。八戸市内の中学校も学級減に伴い、教員数が減り、部活動の数も減っている。そういう意味では現在高校が直面している課題を共有していると思っている。

教員や部活動の数を確保するということが、子どもは集団で学び合いながら、社会に求められる力を身に付けることを考えると、ある程度学校の規模は必要と考える。それを踏まえて、いろいろと工夫して提案されていると思う。

そのようなことを考えながら感じたことがある。子どもが減っているため、今までどおりに高校を配置できないので、喫緊の課題として取り組むしかないが、それは対症療法に過ぎないのではないか。高校、大学を卒業後、県内に残る子どもが少ない。出生率の低下を食い止めるとともに、若者の県外流出を食い止めなければ、本県の子ども数は増えない。そうすると、今後このような会議をまた続けることになるのではないか。

目の前の現実に対応することも大事だが、長期的な視点で人口減や人口流出に対応しなければならないのではないか。

- 三戸郡には高校が4校しかないが、その4校に進学する生徒が多い中学校から話を聞いた。

田子高校には田子中学校の約半数が進学している。田子町には農家が多いが、成功している農家とそうではない農家があり、経済的に余裕のある家庭の20%程度が私立高校も含めて八戸市内の高校に進学する。田子高校は地域校の

候補校となったが、保護者には存続を心配している声が多い。郡部に行けば行くほど子どもの数は少なくなる。田子高校の入学者数が募集人員の2分の1に達するのかどうか不安とのことである。

三戸中学校の校長からの話である。三戸高校には約30%、八戸市内には私立高校も含めて約35%進学している。また、三戸高校では、商業科がなくなったことにより、コースがあるものの特色がなくなったように感じる。進学を考えた場合、岩手県の高校にも通っている。その点も不安とのことである。

五戸中学校の校長からの話である。約40%が五戸高校に進学している。その他、八戸市内の高校に30%、十和田市、三沢市の高校に25%程度進学している。農業科、工業科に進みたい生徒や、進学希望者が十和田市の高校に進学している。五戸町は工業団地があるため結構就職先があり、地元定着は見込めるのではないかとのことである。

私が勤務している名川中学校についてである。名久井農業高校に20%程度進学している。その他、南部中学校、福地中学校からも20%程度が名久井農業高校に進学している。一方、八戸市内には半数程度進学している。南部町も農家が多く、経済格差があるため、地元で高校があつてほしいという声がある。

名久井農業高校に環境システム科ができたことにより、ものづくりの好きな生徒が進学している。

田子高校、三戸高校、五戸高校には普通科しかない。普通科の高校を卒業しても、手に職がないので大学や専門学校に進学するのではないかと。地域では職業教育を主とする専門学科の設置を希望している。また、三戸高校と五戸高校がなくなった場合、果たして田子高校に進学するのかという声がある。一家で八戸に移住する例もあることから、地元の高校を残してほしいという希望もあるが、再編は避けられないと考えている。

- 一点付け加えたい。小・中・高校と12年間を見通した教育を行うため、三戸町では小中一貫教育を行い、三戸高校とは連携協定を結んでいる。このため、小中一貫教育を行う上では、三戸高校は必要である。

(2) 意見交換

委員の意見発表の中に、重点校の教員配置についての質問があつたため、進行役が事務局に説明を求めた。

→ (事務局) 重点校に伴う教員配置については、今後国への要望も含め、対応を検討していきたい。また、重点校とするに当たり規程をつくるのか、という話があつたが、今のところ考えていない。国の研究指定校のようなイメージでとらえてもらえればと考えている。

委員からの意見発表の中に特別支援教育についての意見があつたため、進行役がオブザーバーである特別支援学校の校長に特別支援教育の現状について説明を

求めた。

- 特別支援学校にはセンター的機能があり、家庭や学校等から依頼を受けて、主に就学前の幼児や小・中・高校生の教育相談を実施するとともに、各学校から要請を受けて、研修会の講師等を引き受けるなどして支援を行っている。しかし、まだ要請がある家庭や学校が中心で、特に小・中・高校のつながりの中で、必要な支援を考えるという状況には至っておらず、支援は限られた状況にある。

これまで、支援を必要としている生徒が在籍する地域の中学校、高校及び特別支援学校が一同に会して、発達障害及び不登校等の生徒の現状、及び課題等について話し合いをする機会はなかった。

そこで、10月7日の午後に、高教研の教育相談部会三八地区部会と八戸第一養護学校等が協力して、県南地域の中学校および高校、特別支援学校に呼びかけて、それぞれのステージにおいて支援を必要とする生徒の現状や課題について意見交換をし、まずはそれぞれの状況を理解し合う場を設定する予定である。

発達障害等の子どもたちの行き場がないという、中学校の教員等からの声を耳にすることがある。関係する中学校、高校、特別支援学校がともに手を組み、中学校、そして高校の段階でどのように支援をしていけば良いのか等を含めて、継続的に検討しかつ支援を進め、受け入れ体制を整えていくシステムを考えていく必要があると思われる。

高校での通級指導が平成30年度から始まるということもあり、その前準備としても、現在、中学校と高校、特別支援学校が連携して、特別支援教育の在り方を考える時期にあると考える。

- 定時制・通信制課程に関して話をさせていただきたい。基本的には6地区全てにおいて、高校教育を受ける機会の確保の点から、なくてはならないと考えている。自宅から通える範囲で定時制・通信制課程を配置する必要がある。

答申の11ページに、普通科から総合学科への改編について記載されているが、これはどのような意図で書かれているのか。現在、尾上総合高校に総合学科が設置されているが、なかなか難しいという話を聞いたことがある。もし八戸中央高校に総合学科が設置されれば設備等の充実も必要となる。

また、後期入学の検討についても、教員配置等の財政的な支援も必要と考えるが、このことについても伺いたい。

- (事務局) 普通科から総合学科への改編については、生徒の選択肢の確保という観点から将来構想検討会議において委員から意見があったことを踏まえて記載した。

後期入学については様々な課題があることは認識しており、今後、検討したい。

また、これまでの意見発表において重点校が2校あっても良いのではないかと

という意見があったので、このことについて説明させていただきたい。重点校は各地区のとりまとめを行う中核的な役割を担うという意味である。三八地区においては資料8にあるように、平成34年度までに5学級減が見込まれている。重点校を2校とすると、それだけで三八地区における平成34年度の学級数の見込みの40学級のうち、12学級が重点校に配分されることも考慮する必要がある。

進行役が、商業科の拠点校を県内で1校とした意図について事務局に説明を求めた。

→（事務局） 県内には商業科を有する高校が5校ある。他学科と異なり、連携イメージにあるとおり、商業を学習している高校は県内各地にあり、現在でも商業科を有する高校が他の商業科目を学習している高校と連携している。その上で、現在、青森商業高校が商業高校全体のとりまとめをしていることを踏まえ、青森商業高校を拠点校の候補校としたところである。

進行役から委員に将来の学校規模・配置について意見を求めた。

○ 八戸市内の多くの子どもたちは八戸市内の県立高校か私立高校に通学している。現状として選択肢は十分あると思う。今後、県立高校の選択肢が減ると私立高校に進学せざるを得ない子どもが増える。しかし、私立高校に進学する場合には経済的な負担が増える。また、郡部の学校がなくなり、八戸市内の高校に通学する場合には保護者の負担は増えると思うので、その辺を考慮してもらいたい。

6 閉会